

農村青年社関係出版物



『農村青年』は農村青年社の機関紙。1931年3月20日に鈴木靖之の編集で創刊し、4月に第2号、12月に第3号、32年2月に第4号、同3月に第5号、同4月に第6号、B5版リフレットで各号1500部から2000部が発行された。

自主行動で進め！

俺達は革命を××する時に、誰の命令を待つんだ、誰の命令で動くんだ。誰の命令を待つことはない、共産党じゃあるまいし、命令で動くんじゃない。

やらずにはいられない、そこに俺達の自発的自主行動があるんだ。この自主行動には中央も指令も当然ありえようはずがない。

俺達は個人から個人へ、職場から職場へ、あらゆる層から層へ、巷から巷へ、俺達の無政府主義××思想を充滿させるんだ。

無政府主義運動は自分を解放せんとする運動であって、支配と搾取の真似事を演じる運動ではない。いわゆる政治運動、社会運動、労働運動、もしくは農民運動のように統制や規約やその役員などは一人もいない。かの二、三人も集まれば必ず執行委員長を作り、執行委員を作り、全てが皆その役員たるがとき西洋人を真似て、支配階級は我々の前に我慢していると、資本主義は今や必然に崩壊の道を辿っていると、顔を赤くして自分自らの言葉に酔っているボルシェビキ、全協とは違う。

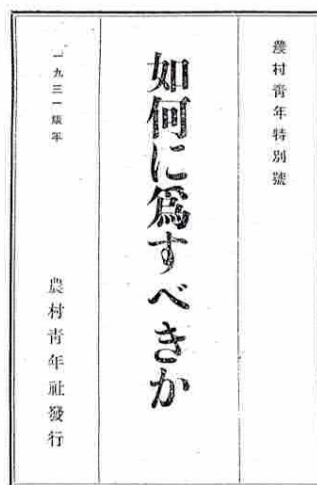
それで俺達は、俺達の職場や居住する地域や、俺達の村々で、その各々の状況によって各人が多種多様な自主行動を起こすんだ。これすなわち分散的自主行動の実際である。

重ねて云う。集中的、統一的になるな。今無政府主義を知った者は、直ちに自ら進んで何者の命令や指導をも持たずに、自主行動で突進せよ。

1931年8月発行『パンと自由』第1号より一部引用、無署名(宮崎晃)ノ一部、読みやすく改変



一九三二年八月一日
最近運動の組織及形態に就いての一提案
—自主行動の強張—
パンと自由社
前下笹原町が越へて



図版右から『農民の友』1931年6月20日発行(主な執筆は鈴木ノ A5版2000部)、『如何に爲すべきか』1931年7月8日発行(鈴木原文に共同加筆ノ B6版1000部)、『最近運動の組織及形態に就いての一提案』1931年8月1日発行(宮崎ノ B5版300部)、『無政府主義研究』1931年1月1日発行(宮崎、南澤製薬松ノ B5雑誌500部)、『黒色農民新聞』、『農民の友』改題)1932年2月1日発行(宮崎、八木ノ B4新聞型1000部)。

望月治郎

MORIMOTO JIRO | 1912-1997

1912年、静岡県庵原郡内房村(現富士宮市)生まれ。別名、秋幸。上京して電気工事店見習工。「自由人」の鈴木靖之を訪ね、アナキズムについて理論的に学ぶようになる。31年、鈴木と八木秋子宅を訪問、宮崎晃や星野準二と会い「農村青年社」5人目の社員として参加表明。「農村青年」如何に為すべきかを携えて、郷里静岡をはじめ、広島や岡山、兵庫、大阪などのオルグ旅行を敢行。宮崎、八木、星野ら共に同居、非法メンバーを形成。32年、資金事件で宮崎らが逮捕がされるさなか、「黒色農民新聞」総選挙に際して青年諸君に訴ふ『信州自由連合』発刊の企画、各紙の発行名義人となる。同年、資金事件により逮捕。懲役1年6カ月で豊多摩刑務所に服役。34年に満期出所し、目黒の船木上宅に一時同居。36年に検挙、37年に懲役1年6カ月の判決。巣鴨の東京拘留所に服役直後に倒れて死去。死因は脳梗塞と言われる。看守に連れられ病監へ歩く途中、星野の居房前で2度大きな咳ばらい。これが死生をともに誓い合った盟友に残す語りかけの最後の証となった。

和佐田芳雄

WAKAZA YOSHIO | 1911-1999

1911年1月2日、広島市尾長町生まれ。広島市の被差別部落に生まれたことから12歳で「尾長水平社」創立に参加。広島組合教会にいた八太舟三から社会の矛盾や差別の不合理を聞き影響を受ける。26年高小卒業後、製靴見習工。上阪後、上野克己、平井貞二、李ネストルらの「大阪・アナキスト青年連盟」に起居、機関紙の発行に携わる。31年、添田晋(宮崎晃)「農民に訴ふ」がアナ青連内に衝撃と論争をまきおこし、発展の自主解散。農青イズムに共鳴し上京、農村青年社に起居して出版や地方通信など雑務に従事。宮崎ら逮捕後に星野や望月と集結するも逮捕され、懲役1年6カ月の判決。34年1月に出所、11月に帰郷して製靴業を継ぐ。35年12月、農村青年社事件で逮捕、懲役1年。38年6月に出獄し、43年まで日本郵船に徴用され、45年8月に被曝、闘病生活を続ける。全日本自由労組広島分会に参加、被爆者団体協議会常任理事。晩年は農村青年社運動史、資料集の刊行に尽力し、その死まで農青社運動について若いアナキストたちに語りつづけた。89年8月10日逝去。



第一次農青社事件出獄記念。1934年3月10日、洗足公園にて。前列左から鈴木靖之、鈴木清士、後列左から星野準二、望月治郎(秋幸)、和佐田芳雄。

船木上

FUNAKI NORIOU | 1912-1946

1912年12月2日、鳥取県西伯郡泉村大字河岡(現米子市)生まれ。別名幾政。30年3月、釜山の公立中卒業後、上京。「黒色戦線」発行人の鈴木靖之宅に出入りするようになり、32年「黒色戦線」同人。宮崎ら主要メンバーの逮捕後、専従として鈴木を援ける。「信州自由連合」創刊や「農村青年」「黒色戦線」続刊に尽力、各地の運動を支援。33年の農村青年社解散声明発表後も分散自立の運動を目指し、鈴木と「黒旗」創刊、発行人。35年、無政府共産党事件で検挙、36年に農村青年社事件で再逮捕、起訴。懲役2年執行猶予3年の判決。出所後は満州に渡り、新京(長春)の八木秋子、永嶋暢子らと交友。敗戦後、ソ連軍管理下にあつて劣悪な労働条件だった西安炭鉱の労働者救済メンバーとして乗り込み尽力するも発疹チフスにより死没。活動家や労働者から尊敬される人物だった。



1938年ごろ

戦前、純正アナキズムは、そうした問題(革命をどう日常的な場面で作っていくか)を、議論の余地から切りすてたのです。どこがどう問題で、どうしていくのかという具体性がないままに、暴力的に、「敵」と対決していくというやり方を、黒連(黒色青年連盟)といわれた人々は、やっていました。権力が侵略戦争へとすすんでいるのに、反体制派のアナキズムの同志達が、少しの違いで敵どうしになって争っているという悲しむべき現実があったのです。

そういう時代の中で、「農民に訴ふ」は衝撃的な出現だったのです。

当時のアナキストの、革命の回路は、天皇をテロして、権力機関を打倒することによる革命の道はあっても、現実の生活の場から登りつめていくという回路が、まったくなかったといつても過言ではありません。

現実の具体性のあるプログラムとして、革命をつき出したこと、又、政治権力の解体という闘争を、日常の闘争へと拡大していったこと、つまり、経済構造そのものを問題にしていたことで、農青の出現は、画期的だったのです。

拠点主義は、その拠点を打ちのめされると、まったく身動きがとれなくなります。

しかし、農青は、たとえ、長野で大量検挙が始まっても、全国で農青イズムで闘い続ける同志をきちんともつていました。それは自主分散の組織の特有な闘い方だからです。

農青は、その思想と行動によって、農村という生活圏を自由コミュニケーションとし、そして、革命的地理区画をつくり出し、人々の思想と生活を変革していったのです。

南澤袈裟松

MINAMISAWA KESAMATOU | 1905-2009

1905年7月10日、長野県北佐久郡南大井村字平原(現小諸市)生まれ。25年、東洋大哲学科入学(中退)。クロボトキン、バクーニンの著書にふれ、アナキズムを信奉するようになる。帰郷して農業のかたわら農民自治会長野県連の闘争、水平社運動などに関わるほか、東信無産者青年同盟、農民闘争社にも参加。31年3月、諏訪地方の島津徳三郎、山田彰、増田貞治郎らが「農村青年社」設立に呼応し、長野県内で同志間の連絡網を確立すると鷹野原長義から伝達をうけ参加。南北佐久地区責任者となる。10月、岩佐作太郎、八木秋子を講師に開いた佐久地方講演会を開催。地方機関紙「信州自由連合」創刊号には「信州農民の進むべき道―自由連合主義の精神―」等を執筆。34年、鷹野原らと協議し、運動再建のため信州アナキスト連盟の結成をはかる。35年6月、信濃毎日新聞に入社すると11月に無政府共産党、ついで農村青年社事件で検挙。37年4月、懲役2年執行猶予4年の判決。戦後は46年にアナ連結成とともに参加。72年『農村青年社運動史』刊行に際しては同人として長野県の資料収集に尽力した。

鷹野原長義

TAKANOHARA NAGAYOSHI | 1900-1977

1905年10月10日、長野県諏訪郡湖東村(現茅野市)生まれ。高小卒業後は農業に従事。親友・海野高衛の影響でアナキズムを知る。26年、徴兵検査時の写真に「軍国主義反対」などと書いて提出。物議を醸して大門村に一家で移住。伐木運搬夫などしながら村の青年たちと読書会など通じてアナキズムの啓蒙活動を展開。31年、宮崎晃「農民に訴ふ」に衝撃を受けて農村青年社への参加を表明。盟友小林茂夫(青年会長)・発行人の村公報「大時時報」に「農民に訴ふ」を改題し連載。八木秋子を迎えて全村運動について協議。また八木、岩佐作太郎を講師にしたアナキズム講演会を開催した。農村青年社解散声明を受けた後も全村運動を続行。34年に長野県の運動再建をめざして南澤と「信州アナキスト連盟」創設を協議したが、35年、農村青年社事件で検挙され起訴。懲役2年執行猶予4年の判決を受けた。敗戦後、アナ連全国委員として長野地方の運動に尽力。最後まで「農民として自主自治農村解放を語ることをやめなかった。72年『農村青年社運動史』刊行会の同人として参画、その資料収集に尽くした。

伊沢八十吉

IZAWA YASUICHI | 1907-1980

1907年12月9日、長野県上伊那郡富県村(現伊那市)生まれ。27年から農業に従事。木下茂「小作人」を通じて農村問題に目ざめ、富県村青年会総務委員としてアナキズム運動の実践を始める。31年、岩佐作太郎、八木秋子らを招いてアナキズム講演会を開催。「黒旗」掲載の「農民に訴ふ」を読んで大きな衝撃を受ける。宮崎晃、星野準二らと会い農村青年社に深く共鳴。村公報「富県時報」(編集人伊沢)に「農民に訴ふ」全文掲載。山田彰らと県内運動の連携を協議。八木秋子を迎え島津徳三郎、鷹野原長義らと会合し、県下の全村運動連絡責任者を決定、伊那地区の責任者となる。青年会の軍事教練義務化の反対、青年会の自主運営要求、自給自足不売不買の農青イズムを説く組合報配布など精力的に活動。32年「信州自由連合」創刊に尽力。35年農村青年社事件で起訴。懲役2年執行猶予4年の判決。戦後は共産党入党、日本農民組合参加。富県農協理事、伊那市議会議員など歴任。72年『農村青年社運動史』刊行会同人。伊那の地を離れることなく、温厚篤実、友誼に厚く、ひたすら農民としての自主自治の道を求めた一生だった。



1937年4月、鷹野原長義の出所記念。長野地裁一審判決は長野側全員執行猶予となり、非保釈の鷹野原はこの判決に服して即日出所した。前列左から、[座っている]山田彰、南澤袈裟松、増田の妻子。後列左から、[立っている]和佐田芳雄、伊沢八十吉、鷹野原、島津徳三郎、松藤鉄三郎、増田貞治郎。

翌日、八木から聞いている富県村の実情を知るため、中央線を経て伊那町にいき、南信毎日新聞の記者、加藤陸三を社に訪ねた。加藤は退社後で、同社の印刷工宮島義夫が案内して暗夜の村道を歩くこと一時間余。富県村桜井部落に辿りつき、伊沢八十吉を訪ねた。星野は携行した黒旗読者のアドレスによって、伊沢の存在はすでに承知していた。「訴ふ」は八木からも届いていた。わら蒔を敷いた板の間に、囲炉裡を囲んで対座し、消えているような薄明りを背にうけ、枯れ枝を焚いて伊沢はもてなした。養蚕で暮しを支えてきて、いま、凋落しつつある伊那合農民の窮状、自給自足の問題等にわたって、夜を徹して語り明かした。伊沢は、「これは今までの他のアナキズム関係のものとは、全く違った性質のものだ。この運動方針は、農村の現実在即し、アナキズム革命の具体的方針を示している。村で実現できる」と、その温顔のなかにも、確信を強くきらめかせて共感を示した。「一番鶏の啼く早曉三人は人目をさけて辞去した。――」未来を村の現実において、確信をもって透視して言い切る伊沢とのこの会談は、爾後の農青運動に暗ける初光にさいして、強烈に光を当てた。